

新潮文庫

時代小説大全集

新潮社編



新潮社

じ だい しょう せつ だい ぜん しゅう
時代小説大全集

新潮文庫

し - 22 - 10



昭和六十二年九月十五日 印刷
昭和六十三年九月二十五日 発行

編者 新潮社

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Keiichi Itô, Shigeo komatsu, Mitsugu Saotome,
Fujiko Sawada, Tatsuaki Shinoda, Ichirô Shiraishi,
Yasuhiko Takiguchi, Michio Tsuzuki, Kenjô
Tsunabuchi, Yô Tsumoto, Norio Nanjô, Mikio
Nanbara, Kaoru Furukawa, Hiroko Minagawa,
Seiichi Morimura, Baku Yumemakura,
Keiichirô Ryu 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-120810-7 C0193

江苏工业学院图书馆

时代小说大集

藏书章

新潮社編



新潮社版

目次

命一両剣客地獄●見世物剣法	伊藤 桂一	七
遠山金四郎誤審控●とつくり侍	小松 重男	九
かなしみ長屋罪草紙●一の酉	早乙女 貢	一〇
鑑定人の密謀●真贋の月	澤田ふじ子	一〇
新釈 藤原定家●マラリア明月記	篠田 達明	一一
十時半睡事件帖●卯	白石 一郎	一二
武士道嫁取り残酷物語●花散りて後	滝口 康彦	一五
雪中怪談●ばけもの屋敷	都筑 道夫	一九
会津戦争後日談●憎(ぞう)	綱淵 謙錠	二三
剣法みちしるべ●肩の碎き	津本 陽	二五

妖婦 下田歌子 ● 嘘は女のお化粧		南條 範夫	二七五
札差剣客・平十郎 ● おいら札差		南原 幹雄	二九九
幕末おんな奇兵隊 ● 女兵記		古川 薫	三三三
俠客に売られた姫君 ● 鬼灯		皆川 博子	三六七
天下太平下の殉死 ● 虫食い忠義		森村 誠一	三六九
伝説の陰陽師 安倍晴明 ● 鬼のみちゆき		夢枕 獏	三三三
秋山要助凶状旅 ● 狼の眼		隆 慶一郎	四七

本文中および巻末解説 尾崎 秀樹

時代小説大全集

命一両劍客地獄
見^み世^せ物^{もの}劍^{けん}
法^{ぽう}

伊^い藤^{とう}

桂^{けい}
一^{いち}

伊藤桂一は大正六年八月に三重県の天台宗の寺院に生まれた。父はその寺の住職だったが、彼が四歳のとき交通事故でなくなつてからは、寺を去り、母や妹とともに変転と浮沈を重ね、生活の辛酸をつぶさに味つた。昭和十三年から二十一年へかけて、前後六年十カ月の間、軍務につき、その青春のほとんどを中国大陆の黄土のなかにすごした。

早くから詩作に傾倒したが、小説を書きはじめるのは戦後、復員してからで、各種の懸賞小説に応募し、芥川賞に三回、直木賞に一回ノミネートされ、昭和三十七年に「螢の河」で第四十六回直木賞を受賞した。

「螢の河」は、小隊長と一兵士の友情を淡々とした筆致で描いた短篇で、はげしい戦闘場面などはなく、事件といえるものはわずかに索敵行の途中で主人公が河へ落ち、擲弾筒を見失うという挿話だけだが、そこには死を凝視した者だけが知るきびしい表情が読まれた。

彼は戦場の中の日常は描くが、戦争小説を書くことはつとめて避けてきた。「悲しき戦記」はその典型だ。それが一つの結晶をしめしたのが、芸術選奨と吉川英治文学賞を同時受賞した「静かなノモンハン」だ。これは旭川第七師団の将校と下士官、兵の三様の体験を軸に、戦場の光景と心理を克明に描き、抑えた表現で、戦争とは何かの問題に迫った。

時代小説を手がけたのは、昭和三十一年の「敵は左内だ」からで、その後短篇集「花盗人」「水の天女」「藤の咲くころ」「紅梅屋敷の女」「深山の梅」などを続刊、長篇では「落日の悲歌」「湖の底」などもあり、連作では葛飾郡小梅村に桃花洞という隠宅を構えた医師、夢庵先生を主人公にした「桃花洞葛飾ごよみ」や元御用聞き風車の浜吉の事件シリーズ「病みたる秘剣」などもある。いずれも人情味あふれる市井物だ。

戦国の世から江戸初期にかけては、なお殺伐の氣風が漂ったが、それだけに剣法者もまた多かった。剣法の創始伝承の時代が、花開きながら、加えて、大名の滅亡離散による、浪人の氾濫をみていたからである。主家のためにいのちを鴻毛よりも軽しと断じた思想は、それを、剣のために、と、置きかえることになった。強者のみが、生き残り得るのである。

——寛永のはじめのころ。

中山道は高崎の宿場の入口、街道脇の地藏堂の板壁に、つぎのような貼紙がしてあった。

告

賭金付他流仕合

天下第一等東軍流 戸ヶ崎鉄之助

左記要旨ニテ他流仕合申受ケ候ニ付、心アル武芸者ハ申込マレ度

一、十月十日朝 辰ノ刻 正岳寺裏広場

一、立合料一件金一両 当方敗者タル場合ハ金十両ヲ呈ス

一、木刀、真劍、望ミニ応ズ 当方死ストモ賭金ハ進呈

但シ対者死シタル場合ノ埋葬料ハ自弁ノコト

立合人 戸ヶ崎門弟

宮之原武一郎

ここは、旅人の往来が多いから、右の貼紙に眼をとめる人も多いはずである。もともと上野国は剣客の多い土地である。上泉伊勢守の新陰流、川崎鑰之助の東軍流、石田伊豆守の無明流など、みな上州につながる剣の創始者である。東軍流戸ヶ崎鉄之助が、どのような来歴を持つのかはわからないが、貼紙をみた限りでは、よほどの剣客と思われた。もちろん、このような他流仕合は、路銀稼ぎのためであるが、土地の人々にとっては、なによりのみものとなるし、噂はたかまった。

貼紙の告示は、実施の日までに十日を置き、十月十日の早朝、告示通りに仕合が行われることになった。

その当日、正岳寺裏の広場は、近在の人々までもふくめて、黒山の人だかりとなった。見物客に迷惑のかからぬよう、宿場の世話人が縄を張って、仕合場所に立ち入らぬようにしてある。

戸ヶ崎鉄之助は、茶店から運び込んだ床几に、軽装の旅支度で肅然と腰を下ろしている。四十歳ほどか。総髪にしていかに名のある剣法者らしい、色黒の引き緊まった表情である。骨格もまた逞しい。他を威圧する炯々たる眼光を持っている。

時刻になると、片隅かたすみの、石に腰を下ろしていた、これも旅装束の武芸者が立って、観衆に向けて一礼して、こういった。

「ただいまより、予告通りに他流仕合を行います。拙者せつしや、戸ヶ崎先生門下にて宮之原と申します。仕合の立合人を相勤めます。お知らせの如く仕合料は申込者が金一両、勝たれた場合は金十両を呈します。勝敗の判定は拙者が行いますが、見物の皆様方の納得のゆきますよう、あきらかに打ち込まれた一方を敗者いたします。もし、仕合申込者のなき場合は、戸ヶ崎先生の剣法を少々披露ひろう申し上げて、責めを果たしたく存じます。では、どなたか、仕合申込みの武芸者はおられませぬか」

宮之原は、そこで、一同を見わたす。観衆は、シンとなる。その、しずまった観衆の一方から、これも四十ばかりの、背の高い武芸者が出てきた。その武芸者は、宮之原に近づくこと挨拶あいさつをする。宮之原は武芸者に「お支度を」といいおいて、戸ヶ崎のところへ行つて、ひとことふたこと話し、戸ヶ崎がうなずくと、今度は観衆に向けて、こういった。

「ただいま、第一の申込者を受けつけました。一刀流、木坂綱之助殿です。諸国武者修業中、修業の一端と思うて、申し込まれた由よしです。木刀をもって戦われます」

身の上の、くわしいことは、敗まけた場合を考えて、話さないらしい。人物、経歴はどのようでもよいのである。要は、勝つか敗けるかである。

支度を終えた両者は、向き合うと、互いに一礼して剣を構える。相青眼あいせいがんで、間合いをつめたが、ともに動かない。賭金はともかく、戦えば勝ちを制したいのが武芸者の真情である。

互いに、相手の秘策を、向きあつて構えた形の氣息の中で、読みとらなければならぬ。つまりは、激しい剣氣のたかまりの持続のなかで、どちらか一方が、氣のゆるみをみせた隙を衝かれれば、それが敗けにつながるのである。

両者は、相青眼のまま、刻が過ぎてても、一向に動かない。両者の息づまる剣氣だけは、觀衆にも伝わるので、まったく動かない両者をみつめながらも、觀衆は寂として声がない。觀衆もまた息づまる思いでみまもる。

四半刻を、かなり過ぎた刻。

木坂綱之助の五体が、低い呻きに似た掛声とともに、一瞬宙を飛んだ、とみえたが、つぎの刹那には、どう、と地にのめり込むようにして、倒れていた。木坂は戸ヶ崎の小手を打つて、剣を無用にさせる勢いで斬り込んだが、それより早く、戸ヶ崎の剣が、木坂の眉間を打ったのだ。

両者ともに、まさに、眼にもとまらぬ早業で、觀衆は、勝負のついたあとも、声もない。氣を吞まれてしまっている。

宮之原は、倒れた木坂のそばへ寄って行き、傷の様子を調べ、その身体を引きずって一方へ寄せると、木坂が脱ぎすてた羽織をその身体に掛けてやり、觀衆に向かい、

「木坂綱之助殿、敗れて、ただいま絶命されました。戸ヶ崎先生の勝と認めます」

といって、一礼し、さらに戸ヶ崎に一礼すると、戸ヶ崎は觀衆に向いて一礼し、席にもどる。

宮之原は、観衆に向けて、こういった。

「物の本に、慶長のはじめのころ、馬庭まにわ念流樋口ねんりゅうひぐち定次と、村上天流とが当地からすがわら烏川原で戦い、天流が斬り込み、逆に脳天を碎かれて死んでおります。ただいまの勝負、その時の模様を思わせる、みごとな勝負とみました。敗者木坂殿もまた、当地にその名を残さるべき、みごとな剣法者と心得ます」

そうして、また一礼し、

「つづいて、仕合にご申込みの方がいられますならば」といって、一同を見渡している。

一撃に対者が息の根をとめられたいまの仕合ぶりをみて、恐れをなして申込み者がいないのではないかと思われたが、つづいて、長身の武芸者が、群衆をわけて、仕合の場へ出てきている。

年はまだ、三十前であろう。若者の凛々りりしさが表情に残っている。これも同じく、宮之原に申し入れて、立合料一両を渡している。

話し合いがすむと、宮之原は戸ヶ崎に報告したあと、観衆に向けてこういった。

「第二の申込み者は、陸奥むつの方ですが、流儀も名も秘めたいとの由です。よってかりに甲野乙平殿と申しあげます。木刀をもって戦われます」

前の時と同じに、両者は、はじめ、かなりの間合いをとって一礼し、歩み寄って、三間ほ

どの間合いをとるべく詰め寄ったが、この仕合は、ふしぎな仕合となった。

戸ヶ崎は、木坂とは、相青眼に構えて動かなかったが、甲野とは、しばらくは相青眼に構えあっていたものの、そのうち剣を右手だけに移して、右下段に下げ、そればかりか、くりとりとうしろ向きになると、そのまま、甲野に向けて間合いをつめてゆく。つまり、一方はうしろ向きになって、うしろ向きのほうが詰め寄ってゆくのである。従って、残る一方は、相手のうしろから打ち込めばよい。

この無謀な戸ヶ崎の応対は、甲野を充分に驚かせたであろう。むろん、うしろをみせている相手には大きく隙があり（とみえてしまうのだが）どこからでも打ち込める。それだけに、（これでよいのか？ 誘いではないか？）——という躊躇ためらいも微妙にある。

その躊躇を押し切って、甲野が、これも、低く叫んで戸ヶ崎の後頭部に向けて打ち込んだ時、つぎの刹那には、身をひるがえしたかとみるまに、宙にひらめいた戸ヶ崎の剣によって、
「憂うれッ」

と、大気を裂くすさまじい、木刀と木刀とが打ち合って火花を発する音がして、甲野の剣は六、七間も中天高く飛び、同時に胴を払われた甲野は、地に伏したまま、もがいて、起き上がろうとするが、起き上がれない。

「宮之原、介抱せよ」

と、戸ヶ崎はそっくり、また、もとの席にもどっている。

宮之原が、甲野を介抱して、片隅に運んでゆくまで、この時も、観衆は、声もなかった。

流派も名も明かさぬ甲野の不遜を、戸ヶ崎は怒って、奇矯の立ち合いをみせて、思い知らせたのかもしれない。

それとも、それが、宮之原がさきにいった、戸ヶ崎先生の剣技——の一つの披露であったのかもしれない。

考えてみれば、一方の技倆が格段に秀れていれば、横向きでもうしろ向きでも、強者が勝つのである。向き合うた時に、戸ヶ崎は、相手の技倆のほどをみぬいたのだ。

宮之原は、甲野の介抱を一応終えたと、観衆に向けていった。

「甲野殿は、幸い、生命に別状はありません。ただ、骨を痛めておられますので、ひと月ほどは旅ができますまい。甲野殿も、なかなかのご力量、打ち込みの氣勢は中条流の流れを汲む「箭の太刀」とみました。が、無念、と答えられたのみです。——さて、つぎに、立ち合いお望みの方がおられますならば」

宮之原は、これもひとかどの武芸者なのだろうが、こういう見世物風の賭け仕合を何度もやっているためか、その口調が、おのずと、口上役のようになっていく。

二者がたちまち打ち伏せられるようでは、とうてい勝目はないとみて、もはや申込者はおらぬのではないか、と思われた時、群衆の中から、みなりは武芸者だが、瘦せて、細竹の杖を突いた男が、それも、どこかたどたどしい歩きぶりで、張縄を越えて、仕合の場へ這入ってきた。一見して、激しい戦いができるのか、と、疑いたくなるような風采である。とにかく